市長戦略
ずっと〝かたの〟もっと〝かたの〟

今年は、「市長戦略～ずっと〝かたの〟もっと〝かたの〟～」について、本市総合戦略の策定に大きく関わっていただいた、まちづくり全般に係る専門家である立命館大学客員教授の髙田昇さんと新春対談をしていただきました。

住みたい、住み続けたいまちづくり

黒田　市長に就任してちょうど1年目を迎え、先般、市長戦略を発表させていただきました。今回、市長戦略を策定するにあたり、20年間隔で物事を考えたときに、単に数字の動向を追うだけでなく、交野市に住んでいるみなさんが何を感じ、どう思っているのかを意識することが必要だと感じました。

髙田　今の時代は、人口問題やインフラ問題など、放っておいたら20年後、30年後にどうなるのかということをしっかりと見極めた上で、今何をするべきかが問われています。これからは行政だけでなく、市民も見方を変えていかなければならないし、市長戦略の最初の柱に掲げられている「住みたい、住み続けたいまちづくり」というのは、基本中の基本だと思います。

かつての「住みたい、住み続けたいまち」のモデルは、郊外にファミリーが健やかに、そして穏やかに住めればいいというものでしたが、今は、単に生活の場というだけではなく、働く場、遊びの場、学びの場、買い物ができる場など、住むための新しい要素をいろいろ作っていくということが不可欠です。

黒田　確かに、私の親世代は自然が豊かで、閑静な住宅街に住まいの場を求めていました。しかしながら、今は、単に自然が豊かなまちだけではなく、暮らしに関わる買い物や子育てに関わる保育所、医療機関が生活圏の身近なところにあり、安心して暮らせるということがトレンドになりつつあると感じています。

これからの交野市にとって、魅力あるまちづくりを戦略的に進めることができる星田北エリアでは、民間企業とコラボして、現代社会に合った、交野市にとってふさわしいまちになるよう誘導していくということが大切な作業であると考えています。

髙田　民間企業にとっても、その地域の人たちの生活スタイル、ニーズにうまく合わせることは、ビジネスとして成立させるために必要なことです。

特に交野市には、人生経験の豊かな専門性をもった人が多くおられます。その人たちと意見を交えながら、「交野市にはこうしたものが必要だぞ」というものを民間企業とつくり、両者にとって良い関係が築ける開発になれば、交野の次の時代につながっていくと思います。

黒田　市民のみなさんに、自分たちが感じていることを明確に言葉として表していただくことは、まちづくりの基本だと思います。これまで作ってきたものをどうリニューアルするのか、あるいはリフォームするのか。もう少し欲をいえば、どう活用していくのかということにも、関わりを持ってほしいと思っています。

今後、さらに高齢化が進み、多くの課題が生じることが予想されますが、決して悲観論に終始するのではなく、むしろどういった機能を持ったまちづくりをしていくか、複眼の視点を持った中で、民間企業の発想や情報を取り入れる作業が、行政にとっては必要になると考えます。

支え合う健康のまちづくり

髙田　長野県は全国で健康寿命が一番長い県ですが、それは行政だけが何か健康に対する取り組みを進めた訳ではありません。市民自ら、自分たちで「やれることをやろう」と、生活習慣をどう改めていくか、健康寿命をどう伸ばしていくかを考え、健康づくりに取り組まれてきました。その積み重ねが「みんなが健康で長生きできる長野」を生み出しました。

交野市も健康寿命の数値を見ると、長野県と遜色ない結果が出ており、市民の健康に対する意識が高いはずです。長野モデルを見本として、行政と市民が一体となり「健康日本一」を目ざすことも、決して夢の話ではないのではないでしょうか。

黒田　確かに、市民のみなさんの健康に対する意識は高く、またそれぞれで健康に関する取り組みを実践していただいており、その結果が数値として表れています。ただ、さらにこの健康寿命を延ばしていくとなったときに、健康という取り組みの主体は誰なのか、あるいは主導権を担っていくためにはどうするべきなのかという点が課題となります。

自ら運動をされる人は、いわゆる「健康のリーディングメンバー」であり、率先して健康のための活動に取り組まれていますが、運動が苦手な人や不得意な人たちに、「ちょっとした運動でも体にいいよね、大事だよね」ということを実感していただくことが大事です。その主導権をどう担うのかというのが、我々としての政策や施策に関わってきます。

私はこれは〝共治〟、いわゆるガバナンスだと思います。

髙田　今、〝共治〟と言われましたが、協働のまちづくりにおいて「健康づくり」は一番効果的であり、必要ではないかと思います。

健康であり続けるということは、私たち自身にとって、どう生涯を送るかということに直結しますし、反面、不健康ということは、単に自分自身の問題だけではなく、必要以上の行政需要を発生させる原因にも成り得ます。

（次ページに続く）

交野市の将来ビジョン
ずっと〝かたの〟、もっと〝かたの〟、自然と人が共生し、子育てと地域の絆で元気な交野！

政策プラン　行革プラン　財政プラン

①住みたい、住み続けたいまちづくり
子育て世帯が住みたいまち、子どもがいきいき育つまち、一度住めば愛着を持って住み続けたいと思うまちづくりを目ざします。

②支え合う健康のまちづくり
健康寿命を延ばすまち、自立促進と地域包括ケアが充実したまちを目ざします。

③未来へつなぐ環境づくり
交野の豊かな自然環境と共存するまち、交野の地域特性を生かし産業の活性化と働きたい人が働けるまちを目ざします。

④みんなで安心安全なまちづくり
住むまちとして誰もが願うことは、安全であり安心して暮らせることです。地域の防犯対策、実効性のある防災対策を進めます。

髙田 昇（たかだ すすむ）さん　〈立命館大学客員教授〉

2012年まで、立命館大学で産業社会学部・政策科学部教授として教鞭を取られました。豊富な実績を生かし、住民の手による〝まちづくり〟、〝まちおこし〟を支援されています。

▷自治体におけるまちづくり計画への関わり

交野市景観まちづくり審議会、枚方宿地区まちづくり協議会、京都市商業集積検討委員会、京都府商店街リノベーションプラン政策検討会議、斑鳩町歴史まちづくり推進協議会など

髙田　そのことにより、本来受けられるはずの行政サービスが実施されず、他市とも格差が生じるといった悪い循環を引き起こすという認識を、まず行政よりも市民が持っても良い時代だと思います。

行政は行政のできることをし、市民は市民のできることをする。行政と市民がかみ合って一緒にやっていく場面をどれだけ作っていくかによって、行政の需要も減らしていけるし、市民ができることをしっかりとするという生活の豊かさは、まちを次のステージに進めていくきっかけになるかと思います。そういう意味で、健康づくりというのは協働のまちづくりの中で、お互いに分かりやすいテーマであると思います。

黒田　健康づくりについては、健康寿命という指標が打ち出されたことにより、市民のみなさんにその取り組みを実感していただける1つの例かと思います。我々行政としても、今後、さまざまな事業・施策を展開する上で、「実感する」「その気になる」ということは大事な視点です。

また、協働という観点からも行政としての強み、市民としての強み、民間事業者としての強みをそれぞれ整理することで、不足している部分を補完し合い、前に進めていくことが必要です。そう考えると、今回、総合戦略・市長戦略を掲げてはいますが、その意味をそれぞれの立場でどう理解いただくかが、1つのキーポイントになるのかなと思います。

未来へつなぐ環境づくり

髙田　交野市には、山があり、田園があり、生活の場がある。そのバランスはとても「健康体」だと思います。その健康体をどう維持し、生かしていくかということが交野らしい環境づくりにつながる。まさに〝未来へつなぐ環境〟とは、都市そのものが健康であり続けることではないかと思います。

黒田　一口に環境といっても、自然環境やエネルギー環境などいろいろな意味が含まれます。ただ、住むまちとして「環境」は外せないキーワードだと思います。

そうした中で、先生がおっしゃった「環境とは都市そのものが健康であり続けること」は、すごく分かりやすく、その言葉の意味を共有しやすいものと感じました。

髙田　先日、私のところに来た建設会社の人との会話で、私が「昨日は星もたくさん見えて、きれいな夜空でしたね」と言うと、その人はきょとんとして「髙田さん、夜空とか見られるんですか」と言うんですね。私は大阪市内在住・在勤ですが、大都市の真ん中にいるとそんなものです。

交野市に住む多くのみなさんは、ごく当たり前に夜空を見上げ、星を愛でて、月を愛でる。そういう生活を日々、無意識にしろ意識的にしろ送っておられると思います。そういった人間の感性というものに支えられて、健やかなまちというものは形成されるのではないかと思います。環境というのは、市民の環境観というか感性に支えられないと、なかなか理屈だけではいかないと思います。

黒田　これからのまちづくりというのは、理論・理屈で説明する部分と、それをまちの価値として、市民が実感できることが重要です。

あともう1つは〝安全〟というキーワードです。〝安全〟には、それなりの投資をしていかなくてはいけませんが、まちづくりのビジョンとして掲げるためには、今後将来にわたって、どういったまちにしていくべきか、どう実現していくのかを明確に示していかなければいけないと思っています。

「健やかなまち」という言葉の意味として、そこに住んでおられる人びとの健康もさることながら、そのまちとしての健やかさも大事だと思います。その〝健やか〟という言葉から感じられる明るさ、朗らかさは、安全・安心を連想させるものでもあります。

みんなで安心安全なまちづくり

髙田　日本は災害大国みたいなところがありますので、市長戦略の4つ目の柱に掲げる「安心安全なまちづくり」は非常に大事なテーマになってくると思います。

かつては、「公助」が大事だといわれてきたのですが、行政が多くの市民の安全・安心をフォローすることには限界があります。

実際、阪神・淡路大震災や東日本大震災では、発生後しばらくの間、行政は無力に近い状態でした。しかし、「共助」が確立しているまちは、非常に被害が少なく立ち上がりも早かったようです。

これは日常のコミュニティーがなせる技で、日頃からのちょっとした子どもの見守り、高齢者の支援、子育てを応援するなどの取り組みが、いざという時の大きな助けになるのです。安全・安心というのは、地域を強いものにしていくための一番大事なテーマです。

黒田　防災と防犯、あるいは先ほどの健康の話もそうですが、やっぱり自分たちをどう守るかについては、個々の取り組みだけではなく、コミュニティーが大事になってくると思います。支え合い・助け合い・絆、これがないと安全は守れないということは明確です。

また、最近では自助・共助・公助の中の共助の部分を2つに分けて、自助・互助・共助・公助という考え方もあります。新たな互助というのは、まさに地域のみなさんでの助け合いということです。

髙田　私も含めて市民はどうしても、行政に対して要求型の姿勢になってしまいます。今の防犯・防災にしても、行政がやるべきといわれますが、行政もそれを黙って受けるのではなく、「行政としても頑張りますが、一緒にやっていきましょう。地域にしかできないこともあります」と、はっきりメッセージとして発信していただくことも大事ではないかと思います。

そうしたことを通じて、市民も賢くなっていき、行政職員の質も高まっていきます。結果として、それが交野市というまちの都市力というものにつながると思います。

黒田　今回、市長戦略を策定しましたが、大事なことはプランニングではなく、むしろ今後この戦略をどう進めていくのかをしっかりと発信していくことです。

また、〝共治〟という点から見て、交野市の現状と、なぜそうした戦略が必要なのかを理解していただくことが重要です。ただ単に、メッセージを発するだけでなく、しっかりと共有を図るためのやり取りをしなくてはいけないと思います。それが、市長戦略を着実に進めていくための確実な一歩につながるものと思っております。